

「ミゼリコルディア」—〈いつくしみの特別聖年〉の精神

主任司祭 アウグスチノ 川村 裕明 神父

2015年12月8日より、2016年11月20日までフランシスコ教皇の呼びかけにより「いつくしみの特別聖年」が始まりました。フランシスコ教皇は第二ヴァチカン公会議終了の50年目にあたり、閉幕式が行われた12月8日を思い起こし、「いつくしみの特別聖年」の始まりの日と定めました。

「いつくしみ」と訳されている言葉のもとは、「ミゼリコルディア misericordia」です。「ミゼリコルディア」は、いつくしみの他、「慈悲」、「憐れみ」や「慈善の業」とも訳されています。そもそもミゼリコルディアとは短剣だったのです。ヨーロッパ中世の騎士の時代、戦いに敗れ瀕死の重傷を負った相手にとどめを刺すために用いられた、30cm ぐらいの刃のない先端が鋭利な短剣のことだそうです。深手を負った相手に慈悲の一撃を与え、苦しみを取り除き楽にしてあげる。ここから、「慈悲」という意味が派生したらしいです。なるほど、仏教の慈悲「拔苦与樂」に通ずるものを感じました。「慈悲」だけではなく、「情け、容赦、幸運、恵み」の意味もあるようです。

フランシスコ教皇は、「いつくしみの特別聖年」を公布した意図を「イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔」という公布の大勅書に記していますが、その26ページに身体的な慈善の業と精神的な慈善の業として、慈悲の所作の言葉全文を引用されています。そして「わたしの心からの願いは、この大聖年の間にキリスト者が、身体的な慈善の業と精神的な慈善の業についてじっくりと考えて下さることです。(中略) 貧しい人が神のいつくしみの優先対象であるという福音の核心を、よりいっそう深く理解



するための一つの方法になるでしょう」と述べておられます。

大勅書の始まりのことばは「イエス・キリストは、御父のいつくしみのみ顔です。キリスト者の信仰の神秘は、ひと言でいえばこの表現に尽きる気がします。いつくしみは生きたもの、見えるものとなり、ナザレのイエスのうちに頂点に達しました……」と記されており、この大勅書、そして特別聖年の意味もこの第1項のことばに尽きるように思います。「教会には、神のいつくしみを告げ知らせる使命がある」とフランシスコ教皇はわたしたちに呼びかけておられます。ミゼリコルディア、いつくしみは抽象的な概念ではありません。それは、思い、言葉、行いを通して示される具体的な業なのであり、教会の使命は具体的な業を通してそれを告げることだと、フランシスコ教皇は語っておら

れるのです。

フランシスコ教皇は、「特別聖年は、つねにわたしたちへと御父が広げておられるいつくしみを日々の生活の中で体験するためのものです」と大勅書を締めくくる第25項で語っています。さらにフランシスコ教皇らしい表現で「この聖年の間に、神に驚かせて頂きましょう。神は、わたしたちを愛していること、またご自分のいのちをわたしたちと分かち合おうとしておられることを繰り返し伝えるために、ご自分の心の扉をつねに開けたままにしておられます」と語られ、続けて「教会は、一刻を争うほど緊急に、神のいつくしみを告げる必要性があると強く感じています」と私たちを促し、そのために「この聖年に、教会が自らを、神のことばがこだまする場とすること」を呼びかけています。

ユスト高山右近は、ミゼリコルディアを実践した人です。高槻城主になり、戦国武将の一人となった右近は、武将としての働きと領地の統治を果たしながら、父・ダリオ高山飛驒守に協力して教会のためにも働きました。

日本に来た宣教師たちによって豊後国（大分）で広められたミゼリコルディア（慈悲）の組をモデルに、高槻教会でも、父ダリオの提案でこの慈悲の組織が作られます。主な事業は、宣教への奉仕と、貧しい者を救済し、葬儀を助け、教会の祭式の準備をし、旅人をもてなすなど、「ドチリナ・キリストン」（キリストン教理書）に規定されている慈悲の所作を全うすることでした。右近も、父ダリオの実践にならい、戦死者家族、寡婦や孤児のために自らの親戚や子どもに対する愛をもって救済に手を尽くしたのです。

いつくしみの特別聖年にあたり、私たちは愛と憐れみ、いつくしみ、連帯を自分の真のライフスタイルとし、互いの人間関係における規範

として、無関心に打ち勝ち、平和を獲得するために、祈りを捧げ活動するよう教会に呼びかけたいと教皇は語られます。連帯といつくしみ、憐れみの文化は、すでに多くの人々によって実践が始まっています。そのような動きに連帯して、私たちもいつくしみの特別聖年の精神のもとに、自分の生活の中にいかに無関心が現れているかを認識し、生活環境を自分の家庭、近隣、職場から改善するために具体的な努力をするように招かれていると、教皇は強調されました。



大阪カテドラルにある“のれん”的「聖なる門」

イエスが母マリアからお生まれになったときに、世界は無関心でした。ただ羊飼い達だけが天使の言葉を信じてイエスのもとに来ました。羊飼い達は、飼い葉桶に眠る幼子イエスと出会い、これこそ神の子であると確信しました。羊飼い達がイエスに会いに来たのは、幼子イエスを拝むためではありませんでした。幼子のことについて人々に知らせるためでした。教皇は、私たちにこの羊飼いと同じようにしなさいと語りかけておられるのです。

私たちは、教皇の呼びかけに応え、高山右近をモデルとしながら、この芦屋の地でミゼリコルディアの取り組みを続けなければなりません。たとえ世界を変えることはできなくても、あるいは人々が耳を貸さないにしろ、神のいつくしみと人類に対する連帯を、自らの行動によって現わして行きましょう。